

〈第146回定期演奏会〉

Program Note

曲目解説「演奏をより深く楽しむために」

音楽評論：東条碩夫



ドビュッシー：クラリネットと管弦楽のための第1狂詩曲

初演：1911年1月16日 パリ

前半は「牧神の午後への前奏曲」そっくり

「第1」とはいても、「第2」は無いのだから、この題名の意味は不明である。同時期に書かれたと思われる別の「クラリネットとピアノのための小品」を改作することを念頭に置いていたのかもしれないが。

両者はいずれもコンクールの課題曲として委嘱され、1909年暮から1910年初頭にかけて作曲されたものだ。この「狂詩曲」の方も、最初はピアノ伴奏版として書かれていたが、初演後にオーケストラ版に編曲されたのだった。

これは、狂詩曲(ラプソディ)という題名から想像されるような、奔放な曲ではない。特定の形式にとらわれぬ自由な発想を持った作品と解釈すべきだろう。しかもその曲想はあくまで印象派作曲家ドビュッシーならではの特徴を持ち、以前の作品「牧神の午後への前奏曲」やオペラ「ペレアスとメリザンド」のそれを連想させるほど美しく、気品に満ちている。

ドビュッシー48歳。すでに「夜想曲」や交響詩「海」などの名作を次々と世に送り、この「狂詩曲」作曲の頃にはピアノのための「前奏曲集」を手がけるなど、作曲活動も引き続き波に乗っていた時期であった。パリ音楽院上級評議会のメンバーにも選ばれ、その上、この若さなのに、なんと伝記までが出版されて……。

作曲家プロフィール



クロード・ドビュッシー

Claude Debussy 1862-1918

パリで生涯を終えた、フランスを代表する作曲家のひとり。楽曲形式や和声法や音の色彩感などに、それまでになかったような感性を発揮し、フランス印象主義派作曲家として音楽史上に独自の地位を誇る。控えめな音量と表現による繊細かつ夢幻的な音楽は、当時一世を風靡していたワーグナーの巨大な力感の音楽に対し、正面から対立する存在であった。管弦楽曲、室内楽、ピアノ曲、歌曲などに不滅の名作を数多く残している。

楽器編成

独奏クラリネット、フルート3、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスーン3、ホルン4、トランペット2、トライアングル、シンバル、ハーブ2、弦楽5部

エスケシュ：クラリネットと管弦楽のための協奏曲

初演：2012年11月19日 パリ

ポール・メイエに献呈された作品

パリ室内管弦楽団、リヨン国立管弦楽団、ビュッフェ・クランポン(木管楽器製造の会社)の委嘱により作曲され、パリのシャトレ座でポール・メイエのクラリネットにより世界初演された。今回はその彼のソロによる日本初演である。

エスケシュ自身は、これを「ポエム・サンフォニック・コンセルタンテ」と呼んでいるが——協奏交響曲ならぬ協奏交響詩とでも訳すべきか。曲に聴かれる3つの特徴として、オーケストラの中に循環する音素材、あらゆる方向から生じて飛び交う多様なエコー、多彩な音色の追求——といった意味のことを彼は挙げている。

曲は、切れ目なく演奏される3つの楽章からなる。彼自身の説明には、第1楽章は「密集した和音で強調された満ち潮と引き潮のような音の間からクラリネットが絶え間なくクレッシェンドし……」、第2楽章は「遙か彼方にルネッサンスのポリフォニーが広がるかのように……」、そして第3楽章は「主題が各楽器の組み合わせの中でさまざまな時代の変奏され……」といったような言葉が含まれている。何となく想像力をかき立てるような表現ではなからうか。

楽器編成

フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2(バス・クラリネット持替)、バスーン2(コントラ・バスーン持替)、ホルン2、トランペット2、トロンボーン、バス・トロンボーン、ティンパニ、マリリンバ、チューブラベル、シロフォン、ヴィブラフォン、タムタム2、銅鑼、シンバル、サスペンデッド・シンバル、スネア・ドラム、ウッドブロック、鞭、ハーブ、ピアノ、チェレスタ、弦楽5部

作曲家プロフィール



ティエリー・エスケシュ

Thierry Escaich 1965-

作曲家、オルガニストとして世界的に活躍中。パリ音楽院では8つの最高位賞を受賞するなど抜群の成績を収めた。1996年にはパリのサン＝ティエンヌ・デュ・モン教会のオルガニストに就任。作品は協奏曲やソロ曲を中心に多数。2017年にはオーケストラ・アンサンブル金沢の「コンポーザー・オブ・ザ・イヤー」にも選ばれ、同楽団の委嘱作「オルガン協奏曲第3番《時の4つの顔》」を自身のソロにより日本で世界初演している。

ビゼー：「アルルの女」第1組曲、第2組曲

初演：演劇 1872年10月1日 パリ / 第1組曲：1872年11月10日 パリ / 第2組曲：不詳

アルルの女に恋した青年の悲劇

南フランスはプロヴァンス地方の、カマルグという農村で繰り広げられる物語。近く
の街アルルに住む美貌の女性に恋した青年フレデリは、恋敵に彼女を奪われ、煩悶の
末に建物の高い窓から庭に身を投じて命を絶つ。主人公の「アルルの女」が一度も姿を
現さないのが、物語の特徴である。

アルフォンス・ドーデのこの戯曲のためにビゼーが作曲した劇音楽は全部で27曲に
のぼるが、その中からビゼーが4曲を選び第1組曲とし、友人ギローがさらに4曲によ
る第2組曲を編んだ。ただしその第2組曲の第3曲に入っている「メヌエット」は、ビ
ゼーの別の作品「美しきパースの娘」から引用されたものだが——皮肉にもこれがこの
組曲中、最も有名な曲になった。

第1組曲第1曲の「前奏曲」冒頭に出る行進曲は、プロヴァンス民謡「王様のお通り」
(戯曲の中で民衆により歌われる)によるもの。第3曲は老いた2人の登場人物が昔を
回想する感動的な場面に関連している。第4曲「鐘」は聖エロワの祭の朝の光景。

一方、第2組曲第2曲の美しい主題はのちの世に「神の子羊」という曲に転用され
た。また同第4曲は全体の頂点で、前記「王様のお通り」と、祭りの舞曲「ファランドー
ル」が順に登場し、後半ではこの2つが見事に合体して熱狂的な昂揚を形づくる。

楽器編成

フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリ
ネット2、サクソ、バスーン2、ホルン4、トランペット4、トロンボーン2、バス
トロンボーン、ティンパニ、プロヴァンス太鼓、大太鼓、シンバル、スネア・ドラム、
ハーブ、弦楽5部

作曲家プロフィール



ジョルジュ・ビゼー

Georges Bizet 1838-1875

パリに生まれ、パリ近郊ブージヴァルで他界した、フランスの代表的作曲家のひと
り。セイロンを舞台にしたオペラ「真珠採り」とスペインを舞台にしたオペラ「カル
メン」、それに「交響曲八長調」とこの「アルルの女」が彼の人気作。特に「カルメン」
は、19世紀末に一世を風靡した「現実主義オペラ」の先駆的存在として、オペラ史
上画期的な作品でもある。だが、その初演のわずか3か月後に彼は急逝してし
まった。

ラヴェル：ボレロ

初演：1928年11月22日 パリ(バレエによる上演) / 1930年1月11日 パリ(演奏会形式による)

ラヴェルならではの名人芸的な管弦楽法

これはロシア出身の有名な舞踊家・女優のイダ・ルビンシテインからの委嘱で作
曲されたもの。

「ボレロ」とはもともとスペインの舞曲で、18世紀末にラ・マンチャ出身の舞踊家
セバ스티アーン・セレソが始めたものというが、親しみやすいリズムのため、形を
変えて欧米各国に広がって行った。ラヴェルもそのリズムを独自の形で使用してい
る。

小太鼓が弦のピッツィカート(はじく奏法)を伴い、2小節からなる2種のリズム
を1対とし、微かな弱音で開始する。このリズムが全曲を通じ、実に169回も繰返
されて行くのだ。その上に乗る主題は、最初にフルートで出る16小節の旋律と、続
いてクラリネットで出る16小節の旋律で、これらが1対となり反復されて行く。しか
もその間、楽器は次第にその数を増し、その厚みと音量を増大させて行き、最後は
とどろくような大音響に達するのである。

調性は一貫して八長調を基本としている——ただし途中には、複数の調が同時に
鳴るといふ個所もある——が、最後のクライマックスの中で、わずか8小節間だけだ
が突如としてホ長調に転調する瞬間は劇的だ。

当時、この曲を聴いたある貴婦人が、その奇抜な手法に呆れ、「ラヴェルはどうか
しているわ!」と叫んだ。それを伝え聞いたラヴェルが、「彼女はこの曲を真に理解
しているな」と笑った、というエピソードが残っている。

楽器編成

フルート2(ピッコロ持替)、ピッコロ、オーボエ2(オーボエ・ダモーレ持
替)、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2(E♭クラリネット持替)、バス
クラリネット、サクソ2、バスーン2、コントラ・バスーン、ホルン4、トラン
ペット4、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、大太
鼓、スネア・ドラム2、シンバル、タムタム、チェレスタ、ハーブ、弦楽5部

作曲家プロフィール



モーリス・ラヴェル

Maurice Ravel 1875-1937

パリで世を去った、フランス最大の作曲家のひとり。オーケストラに与える色
彩感の豊かさでは音楽史上屈指の存在であり、「オーケストラの魔術師」と呼
ばれた。またその几帳面で正確な仕事ぶり、精緻な音楽づくりゆえに、大作
作曲家ストラヴィンスキーからは「スイスの時計職人」と呼ばれたこともある。小
柄だったが、お洒落な服装と上品な雰囲気でも定評があった。作品には他に
も「ラ・ヴァルス」「マ・メール・ロワ」など傑作が多い。